

スウェーデン再発見

ニルスと旅する

NILS HOLGERSSON UNDERBARA RESA GENOM SVERIGE

スウェーデン



監修：齋藤惇夫

作家・児童文学者。福音館書店の専務取締役（編集責任者）として子どもの本の編集に携わり、2000年に退社、創作活動に専念。著書に『ギリックの冒険』（岩波書店・日本児童文学者協会新人賞受賞）、『冒険者たち』（岩波書店・国際アンデルセン賞優良作品賞受賞）、『ガンパとカワウソの冒険』（岩波書店・野間児童文芸賞、国際アンデルセン賞優良作品賞受賞）などがある。

第四回 〈愛する子どもたちへ〉

子どもたちに最善を



「可愛がられ抱きしめられた子どもは、世界中の愛情を感じとることをおぼえる」——スウェーデンの中学校の教科書に掲載されている詩の一部です（※1）。数年前日本の皇太子様が誕生日に朗読されて話題となり、同時に自立性を重んじるスウェーデンの教育スタイルや、「子どもの最善」を最優先にする姿勢が脚光を浴びました。

子どもを抱きしめて育てる：「ニルスのおしぎな旅」が書かれた当時のスウェーデンでは、まだ「子どもの権利」に関して多く語られることはなく、女性たちの社会的な解放と同時に、ようやく育児や教育に目が向けられ始めたばかりでした。しかしそんな中、作者であるラーゲルレーヴは「ニルスのおしぎな旅」の中で、子どもたちをその手で抱きしめようとするかのように、いくつもの温かなメッセージを残しています。

たとえば、スウェーデン中西部

のヴェルムランドを旅する途中、ニルスは7人の男たちが言い争うのを耳にします。7人はみなヴェルムランド地方の違う場所の出身で、それぞれに自分の生まれ故郷が一番素晴らしいと言い張り、喧嘩になりかけていました。そしてそこに通りかかった老人が一つの「古い話」を始めます。

さて、この南の土地に、ひとりの巨人が住んでいた。巨人には7人の息子がいた。息子たちはみな気概があつて力も強かったが、負けずぎらいな連中がそろつていてよくけんかになった。どいつも、自分が兄弟のなかでいちばんすぐれていることを見せつけたかったのだ。父親は息子たちのけんかが絶えないのをきらつて、それをおわらせようと、ある日、七人を呼んで話をした。（下巻 408頁）

巨人は7人の息子たちに、「誰が一番すぐれているのかを試す」

この法律の制定には、「長くつ下のピッツピ」の作者であるアストリッド・リンドグレーションが深く関わっていますが、そのリンドグレーションに大きな影響を与えた人物こそが、誰あろう、セルマ・ラーゲルレーヴだったことを思うと、まさに「ニルスのおしぎな旅」が時代を超え、スウェーデンという国の進む方向を決めたとも言えるのです。

子どもを一人の人間として尊重し、媚びず、甘やかさず、常に子どもの目線で考える——「子どもの最善」を司法の出発点としているスウェーデン社会のあり様は、現在、私たちの国が最も学ばなければならぬことであるはずです。

※文庫は福音館書店発行、セルマ・ラーゲルレーヴ作「ニルスのおしぎな旅」上（下巻）（菱木晃子訳）によります。

Present



訳者・菱木晃子さんのサイン本を上・下巻セットにして、抽選で1名様にプレゼントいたします。一昨年「ニルスのおしぎな旅」生誕100周年を記念し、新訳で甦った珠玉の冒険物語です。ご希望の方は、同封のコミュニケーションカードか官製はがきに、ご希望の賞品名・住所・氏名・年齢・電話番号・メールアドレスを明記の上、ご応募ください（2010年1月20日消印有効）。官製はがきでご応募の場合、P.26の「お便り募集」の宛先までお願いいたします。なお、当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。

今から100年以上も前、小学校の地理の副読本として書かれた「ニルスのふしぎな旅」。スウェーデンでは誰もが幼い頃に読み、心に刻む大切な物語です。今や環境先進国、福祉大国と呼ばれ、女性の社会進出や教育面でも注目を集めるスウェーデンを支え続けてきたものは何なのか…。物語を読み解きながら、その根底に流れる「スウェーデンの力」を探ります。

と伝え、荒れ果てた未開の地を一日でどれだけ耕せるか競わせます。我こそはと意気込む7人は馬と犁を整え、一斉に出発しますが、大きな岩に硬い土、ぬかるみ、崖：開墾のためにまっすぐで平らな溝を掘ることは容易ではありません。なんとかやり終えて自分の仕事に満足する者、与えられた土地が悪かったと嘆く者、自分の作った溝は最悪だと肩を落とす者：しかし、父親は全員の耕した場所を見て「みんな素晴らしい仕事をした」と満足しながら話します。

息子たちは父親のことをきいて心から喜んだが、それでも、どれの耕した溝がいちばんいいかを知リたがった。父親はいった『こんなふうによく耕された土地では、どの溝がいちばんいいかよりも、すべての溝がたがいの個性を尊重しあっていることがいいのだ』（中略）：わたしがいいたいのは、おまえたちも、おまえたちが作った溝と同じことだ。父親というのは、息子のうち、だれがだれよりすぐれているということに喜びを感じるのではない。長男から末っ子まで、どの



挿絵：ベッティール・リーベック 1887-1945
1931年版原書の挿絵を描き、高い評価とともに長く親しまれている。

子どもと同じ気持ちでながめられてこそ、心の平穏が保てるのだ』（下巻 413頁）

子どもは社会の財産



どの子ども同じように可愛く、大切だ、と言い切る巨人の言葉は、そのまま作者の言葉でもあります。子どもたちはそれぞれ違う。けれど、それぞれの個性

はそれぞれに素晴らしく、尊重され、守られ、愛されるべきだというこのメッセージは、100余年の間、この本を読む子どもたちを励まし、抱きしめ続けてきました。そしてその「子どもを思う気持ち」は、スウェーデン社会においての「子どもは社会の財産であり、社会全体で守り、育てていくべきもの」という共通認識となつていくのです。1949年に制定された「スウェーデン親子法」にはこう記されています。

「子はそれぞれの特性に応じて、一人の人間として尊重され、体罰またはその他精神的虐待を受けない。」（スウェーデン親子法6章第1条より抜粋）

※1：「あなた自身の社会 スウェーデンの中学教科書」川上邦夫訳（新評論）よりドロシー・ロー・ノルト作「子ども」